

## 中学校公民的分野「人間社会と家族」の授業(Ⅰ)

——内容構成の原理と学習指導案の作成——

今谷順重<sup>\*</sup>・安部 登<sup>\*\*</sup>・安立 良<sup>\*\*</sup>・曾田満子<sup>\*\*</sup>

Nobushige IMATANI, Noboru ABE, Ryō ADACHI and Mituko SODA  
Planning The Lesson of "Human Society and Family" in Secondary  
Social Studies Part I—The Rationale and the Course of Study—

### I 現行「家族生活」の学習の問題点

#### 1 現行「家族生活」の特色

現行の中学校社会科公民的分野では、日本国憲法の理念を基礎として民主社会における個人の在り方を理解させるという分野全体の目標を達成するために、重要な役割をもつ最初の単元として「家族生活」の学習がおかれている。そしてこの単元のねらいは大きくつぎの3つに分けることができる。第1は、家族生活そのものについての実質的な内容の理解を深めることである。家族生活は社会生活の重要な一領域であり、われわれにとってきわめて大きな影響をもつ最も身近な社会現象である。そして急激に変化する今日の社会において家族生活もまたさまざまな問題に直面している。したがって、家族の社会集団としての特色や家族制度の変遷、現在の家族をめぐる諸問題について理解を深めることは、公民的分野がめざすべきひとつの重要な課題であるといえよう。第2に家族生活の学習は、公民的分野全体への導入としての役割を期待されている。つまり、現代の家族生活がかかえている諸問題についての考察は、それを単に家族という狭い視野からひとつの小さな社会集団の問題としてのみとらえるのではなく、地域社会の機能や国の政治経済などより広い社会の仕組みと結びつけて考えることの必要性へと導く。その結果、家族生活についての学習は独立したひとつの単元としてそれ自体の完結性をもつと同時に、後に続く「社会生活」「経済生活」「国民生活と政治」といった単元をひとつの必然的な探究の流れの中に位置づけることによって、公民的分野全体への学習のきっかけをつくりだし生徒の学習意欲を喚起することができるのである。またこの単元では、公民的分野において育成すべき態度や能力の基礎について、つまり社会に生じる問題に対して関心をもち、それらの問題の所在を明確に把握し、それについて自分の意見がもてるよう統計や資料にもとづいて調査し考えるなど以後の学習に必要な学習方法の基礎を身につけるという意味でも導入の役割を果たしているといえることができる。第3の

ねらいは、血縁で結ばれた最も普遍的で基礎的な社会集団としての家族の学習を通して人間の社会的本性についての理解を深めることである。人間は本来社会的存在でありいろいろな社会集団の中で生活を営んでいる。それゆえ人間は、個人相互に接触をもち互いに影響しあい行動を規制しあうという社会関係の中でのみ生活を維持していくことができる。したがって、人間の社会的本性の根拠とその起源についての明確な認識は、民主主義の理念に立ったより人間的な社会生活のあり方を追求するという公民的分野全体の目標の中で、その導入単元としての家族生活の学習に課せられた重要な課題であるといえることができる。

そして、これらの目標を達成するために組織された現行「家族生活」の内容構成はつぎのようになっている。大単元「家族生活」(14時間)小単元1 家族集団とその機能(4時間) その内わけは個人と社会(1時間) 家族と社会集団(1時間) 家族の機能(2時間)である。ここでは、人間は本来社会的存在であることに気づかせその典型的な表われとしての家族集団の意義と機能について理解させることが主なねらいとされている。

小単元2 家族制度(5時間) その内わけはさまざまな家族(1時間) 古い家族制度(2時間) 新しい家族制度(2時間)である。ここでは、改正前の民法のもとにおける「家」の制度と比較しながら、現行民法における個人の尊厳や両性の本質的平等の原理にもとづいた新しい家族制度の意義について理解させることが主なねらいとなっている。

小単元3 家族生活の課題(5時間) その内わけは家族間の諸問題(2時間) 家庭裁判所の仕事(1時間) 家族生活の向上(2時間)である。ここでは、こうした健全な家族生活を維持していくうえでのさまざまな問題点について学習することをとおして、日本国憲法や民法の考え方を具体的な生活場面の中で生かし発展させていくとともに、家族生活の向上も個々の家族や家庭の努力だけでなく、経済や政治のはたらきによらなければ実現できない面が多いことに気づかせることが主なねらいとされている。

このように家族生活についての学習は、導入単元とし

\* 島根大学教育学部社会科研究室

\*\* 島根大学教育学部附属中学校

て公民的分野全体の中でもきわめて重要な位置をしめていることは明らかである。この点について榊原・平田・梶編『公民的分野の指導事例』明治図書1971では、「民主主義社会における人間のあり方を追求していく上で、家族生活は、学習する生徒の生活経験から考えても、最も身近でしかも親しみやすい素材を豊富に提供してくれる場である。公民的分野の学習を『家族生活』から展開することの意義は、こうした家族生活についての学習をとおして、社会的存在としての自覚や個人の役割を具体的に学び、『国民主権をになう公民として必要な基礎的教養をつちかう』すじみちを明らかにしようとするところにある」とされている。つまり「家族生活」の単元は、公民的分野の学習を単に政治・経済や社会の機構＝制度論に終始させ現実の動きからかけはなれたたいくつなたてまえ論に終らせないようにするためのきりこみ口として位置づけられているということができよう。

## 2 「家族生活」の学習の問題点

しかしこのような位置づけとは反対に、実際に授業を担当する現場教師の間では、家族生活の学習はむずかしい、何をどう教えてよいかよくわからない、教師も生徒も興味がわかずつまらないという声をよく耳にする。そして、せいぜい5、6時間もうしわけに授業を行ない「社会的存在としての人間」といった問題をはじめ、家族生活でおさえなくてはならない内容のかかなりの部分かはしょられてしまっているのが実情のようである。また、現実の家族生活に根をおろした具体的な動きをとらえる視角が弱きわめて抽象的な知識の注入に走る傾向も強い。つまり教育現場の悩みは、「家族生活」の学習では何を教えるのかという内容の面だけにとどまらず、どう教えるのかという方法的な面についてもはっきりとしたイメージがわいてこないという点に集約されるようである。さらに、「家族生活」から公民的分野の学習をはじめるとは、民主主義と平和の実現をめざした憲法学習を骨抜きにし、日本国憲法の理念に背をむけた反民主主義教育をめざそうとするあらわれであるといった批判すら一部に聞かれるのも現実である。そこでわれわれの共同研究では、公民的分野において大切な課題をもつ単元として位置づけられながら、現実には多くの問題をかかえている「家族生活」の学習を、より合理的な説得力のある質の高い内容によって裏づけられ、しかも教師にとっては教えがい生徒にとっては学びがいのある公民的分野の導入単元にふさわしい楽しい授業内容にするためにはどうすればよいかという観点から、その改善の方向をさぐってみることにした。この単元には先にも述べたように原則として14時間の授業時数が割り当てられており、短期間にその全内容構成について検討を行なうことは困難である。その作業は目下継続中であるが、こ

では主にそのなかの第1小単元である「家族集団とその機能」の内容構成の改善を中心に論を進めたい。

## II 「人間社会と家族」の新しい内容構成

われわれがうまれおちた瞬間から好むと好まざるとにかかわりなく所属している家族は、たしかにもっとも身近であり、具体的であり、学習の対象としてとつきやすい面をもっている。またこのことは、家族という学習の素材が、単に冷たく対象化された存在としてではなく、感動や実感を伴ったわれわれの生活に直接大きな影響をもつ現象として社会生活を理解させるための絶好の材料であることをも意味している。しかし反面このことは、ひとつ見方を変えれば、もともと家族生活そのものは子どもたちにとってきわめて当りまえのことであり、あらためて知的好奇心を示すだけの対象とはなりにくいものであるということもできる。いわばそれは、私たちがうまれたときからずっと生きていく空気と同じように、あまりにも身近なものでありすぎるために、あらためてその存在を深く意識することのないままきわめて自明のものとして存在しているのである。そういう意味で家族とは、ふだんの生活の中であまりつきつめて考えることの少ない対象であり、人間にとって最後までわからないのがほかならぬ自分自身であるように、いざ定義づけようとするときわめてむずかしくとらえにくい対象であるということができる。そしてここに家族生活の学習のむずかしさの原因が存在している。つまり家族生活の学習では、ただ生徒の日常生活における直接経験のみを素材としていたのではその本質がきわめてとらえにくいということである。それゆえ家族生活の学習を生徒にとって興味のあるものとして展開するためには、当り前の家族生活が目新しく見えてきてそれを深く探究したくなるだけの知的好奇心がわくような、日常の常識性を打破することのできる新しい視点を用意することが不可欠となってくる。そういう、家族生活について考えるためのいわば一段深い視点として、われわれは比較種族的、比較文化的アプローチとよばれる研究方法と概念探究学習とよばれる教授・学習理論を採用し、これら2つを内容構成の基本原則とすることにした。

### 1 比較種族的・比較文化的アプローチ

最近文化人類学や生態学などで特に注目されるようになったこの比較または対照とよばれる研究方法は、一見なんのつながりもなくむしろ奇異にさえみえるさまざまな社会現象を互いに比較し、そのなかで共通にみられるものとそうでないものとをふるいわけ、共通にみられるものを軸として事実ないし現象を整理していくというやり方である。この方法を家族生活のための内容構成原理として使用した場合つぎのような利点が生じる。ひとつは、たとえばあまりにも所与の事実になり切ってしまう

生徒たち自身の家族生活を、そこで使用されている知識や技術は彼ら自身の場合と鋭い対照をなしているけれども、あらゆる人間がもっている家族の内的な論理をよりよく示していると思われるエスキモーの家族と対比させることによって、さらにまたさるやかめといった他の動物の家族と比較させることによって、日常熟知している枠内での自分たちの家族生活の把握から一步踏み出し、日常化されたものにつきまとうあいまいさをうちやぶることを可能にするということである。つまり比較的方法は、子どもたちにとってあまりにも親しくなりすぎた現象に否定的な事実をつきつけることによって精神的な動揺を与え、あらためてもう一度それを追求の対象にするに十分なだけの知的好奇心を喚起することができる。それは、学習を自然発生的な動機にのみ依存するのではなく、積極的かつ意図的に学習の興味をつくりだすための方法としてきわめて効果的なものであるということができよう。比較のもつもうひとつの利点は、これをうまく活用することによって認識の質を飛躍的に高めることができるということである。すなわち比較は、それぞれの現象にみられる同一性と差異をふるいわけ、共通にみられる構成要因のみを抜きだしてそれを法則的知識としてとらえていく方法であるから、単一個体を観察する場合よりも容易にかつすどく事象の本質にせまることができるわけである。特に家族生活の学習では、社会的存在としての人間の本性についての認識などきわめて抽象度の高い概念の形成が意図されており、また一方では生徒たちにとって家族生活のようなあまりにも親しくなりすぎたものに存在する一般性を見い出すことはいかにむずかしいかという点について考慮するならば、この比較法は、家族生活の学習にうってつけの内容構成原理であるということができよう。<sup>①</sup>

## 2 教授・学習理論としての概念探求法

つぎにここでは、家族生活についての知識をどのような授業展開過程を通して習得させていくかを規定する教授・学習理論として、概念探究法の考え方を採用している。その特色は、授業の流れを方法的には直観から論理へ仮説からその検証へ、内容的には具体的事実から概念的抽象化へという小さなサイクルの漸進的積み上げとして組織するというものである。ここには、授業展開の過程は原則として子どもの認知的発達に法則性に則したものであるべきであり、子どもの認知的発達のメカニズムとは、その厳密さこそちがえ、社会学者が社会を認識する際の手順と同じ性格をもつものであるから、社会科学の授業は仮説の設定とその検証のたえずくりかえしという社会科学の方法の習得過程を授業展開の基盤とすべきであるという理論的裏づけがある。そしてこの仮説とその検証のメカニズムからなる社会科学の方法を自己の

思考のメカニズムと同一化させさらにそれをより確かなものへとみがきあげていくことによって、生徒は社会的環境を把握する能力を拡大し人間や社会についての知識や理解を無限に発展させていくことができる。それゆえ社会科学の方法の習得こそ社会についての知的理解を促進させる最大の武器であるとするのである。

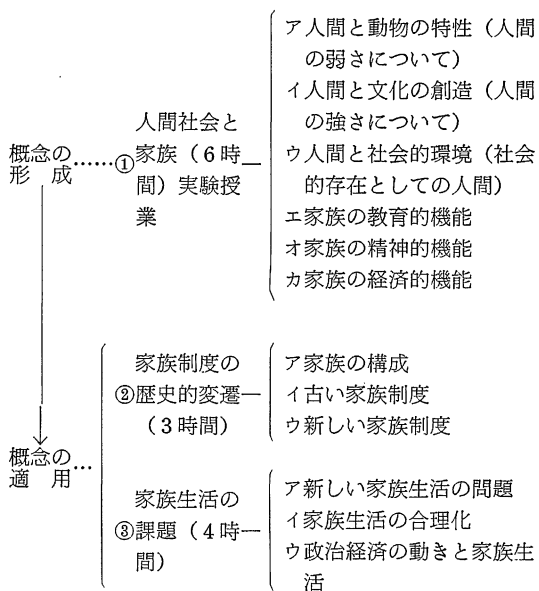
そのためにわれわれは実際の授業を組織するための基本的要素として、概念的知識の設定、発問の構造化、資料の厳選と効果的な提示、教師と生徒による説明の促進をあげ、これらの要素の相互作用的な展開過程として授業をとらえることにした。概念的知識とは、社会事象について生徒が日常生活の中ですでに習得している見方考え方よりも一步進んだより抽象度の高い知識理解であり、その正当性が社会学者をはじめ他の多くの人々によっても承認されているいわゆる社会事象についての客観的法則である。概念探究法にもとづくすべての授業は、この概念的知識への到達を目標として組織され展開される。そして、この授業過程が目標に向かってせまっていくことができるよう生徒の活動を案内し方向づけるのが教師からの問いかけとしての発問である。われわれはこの発問を主要発問と補助発問に分け、目標としての概念的知識によって規定された固定的な性格をもち、授業展開の核となるものとして教師があらかじめはっきりと設定しておかなければならないものとして主要発問を位置づけた。それに対して補助発問とは、具体的な授業場面での子どもとのやりとりの中で教師がすばやく作りだし臨機応変に変えていくことのできる流動的な性格の問いかけである。主要発問と主要発問の間を補助発問で追いつきながら目標にむかって生徒を動かしていくのが授業構成者としての教師の役割である。しかし一方的な発問だけでは十分内容の豊かなそして確かな根拠にもとづいた子どもの思考を触発することはできない。思考のための課題設定をおこなうための効果的な発問と同時に、子どもの直接経験の狭さをおぎない考えるための手がかりとして作用する適切な資料が必要である。さらに資料は、生徒がこれまで知らなかった新しい事実を導入することによって、学習に対する問題意識や興味関心を飛躍的に高めることをも可能にする。このような意味で、学習目標に到達するために最も適した資料を厳選しそれを授業展開の中でうまく活用することが重要であると考えた。また実際の授業では、教師の問いに対して生徒が資料をもとに考えを発表するいわゆる『答え』がきわめて大きなウエイトをしめている。この答えこそ子どもの思考内容の表現であり、答えの中味をいかにして単なる思いつきやひらめきのようなあいまいなものからしっかりとした証拠をふまえた確信のもてる社会の見方考え方へ、しかもその内容が合理的かつ客観的な質の高いものへと変えていくかということこそ授業の究極的目標である。し

たがってわれわれは、この子どもたちの答えの出し方や答えの中味そのもののひとつひとつをもっと大切に、注意深く検討するために、これを問いに対する資料をふまえた説明としてとらえなおし、どのようにすればこの説明を教師と生徒の間、生徒同士の間で量的に活発化させると同時に質的にも向上させより科学的なものに発展させていくことができるかを授業展開を考えるためのもうひとつの重要な視点とした。これら3者の関係は、発問は生産的思考のための条件であり資料は思考のための素材であり説明は問いに対する回答すなわち認識の中味としてとらえることができるであろう。このような授業展開過程に関するいくつかの視点を駆使しながら、家庭生活についての子どもたちの日常的な認識を打破しより高次な認識へとかきかえていくことができる学習場面をいかにして設定するかがつぎの課題となる。<sup>⑧</sup>

### 3 大単元の構成

われわれは「家族生活」全体の内容構成をつぎのように計画した。

指導計画 「家族生活」 (13時間)



単元構成の大きな流れとしては、この表からもわかるように、小単元①で以後の家族学習の基本的視点として確立した諸概念を小単元②③で具体的な現実の動きに適用してみるといういわゆる概念の形成とその適用という形で構成されているのがひとつの大きな特色である。

### 4 小単元①の内容構成

今回の共同研究では、小単元①「人間社会と家族」の計6時間のみを教材化し、島根大学教育学部附属中学校3年の4つのクラスで実験授業を行なった。小単元のそ

れぞれの授業の到達目標として内容の骨組を形作る概念の知識の体系は以下のとおりである。

#### 寄与観念1

人間はほかのどんな動物よりも成熟がおそく、環境に適応するための本能的な行動様式をもたないひ弱な存在である。

#### 寄与観念2

人間は他の動物にはみられない肉体的特質によって文化をつくりだし、自然の拘束をたちきつて自らの意志で自由に行動することができる。人間だけが自分自身の行動を環境に適応させるとともに環境そのものをつくりかえるという大きな力をもつことができる。

#### 寄与観念3

人間の本性すなわち他の動物にはみられない人間独自の能力は、適切な社会的刺激と社会環境がなければ十分に発達することができない。人間は社会生活に参加することによってはじめて人間となることができる。

#### 寄与観念1

家族は言葉をおぼえ善悪をみわける力をやしない、社会的規則を身につけさせることによって子どもを自立した人格へと育成する。

#### 寄与観念2

家族員相互の人格的な結合、感情的融合は、人々を孤立や不安、心身の疲労や緊張から解放し、平静と英気を回復させる。

#### 寄与観念3

家族は生活のために必要な衣食住を確保し構成員の基本的欲求を充足させる経済的単位である。

#### 寄与観念4

家族は世代の交代のために必要な条件を保障し、次の世代をつくりあげていくことによって種族の繁栄を確保する。<sup>⑨</sup>

#### 主要観念1

人間は生存のための物質的要求とともに社会生活を通してのみ人格を形成し自己の能力を發揮しようという独自の社会性のゆえに集団を形成し共同生活をいとなむ。

#### 主要観念2

家族は一個の無力な生物学的有機体として生まれた人間を、種々の文化的能力をそなえたたくましい自立的存在につくりかえるための最小の社会集団である。

本小単元は、社会的存在としての人間の本性の学習を中心とする前半3時間の授業と、家族集団の意義と役割についての学習を中心とする後半3時間の授業に分かれる。前半は主に、人間とかもめやさるやおおかみとの比較を中心とした比較種族的な学習を基盤に構成されており、後半は自分たち自身の家族とアメリカやヨーロッパの家族、エスキモーの家族といった比較文化的な学習を

基盤に構成されている。まず第1時間目では、生まれた時から母親がえさをとるためにどんな姿勢をしてもまた敵からのがれるためにどんなに猛スピードで走っても、けっしてふり落とされずに母親の体にしっかりとつかまっていることのできるさるの赤ちゃんや、卵の中から自分の力で殻を破って生まれ出、その日のうちに歩き、だれからも教わらなくても親の警戒声によって巣から逃げだし、飛翔運動をはじめようになるかもめのひなの行動の発達がとりあつかわれる。ここでは、他の動物が生まれつき身につけている本能的行動様式の精巧さに対して人間はいかに無防備でひ弱な存在としてうまれてくるかに気づかせることによって、ともすれば人間は他のどんな動物よりもすぐれた存在であるのがきわめて当然なこととしてとらえがちな生徒の認識に、ひとつ新しい見方を切り開くことを目的としている。第2時間目は、しかしこのひ弱さこそやがては他の動物がおよびもつかない人間独自の強さ優秀さを形成する根源的な力となるものであることを理解させることによって、それを単なる弱さとしてではなく柔軟性可能性の大きさとしてとらえ直させることを目的としている。またここでは、このひ弱さを実質的な強さに転換しうる具体的要因として、二本足による直立歩行、そこから生じる手の自由化、手の親指の機能の特殊化、視野の高さと広さの獲得、脳の飛躍的発達といった人間独自の肉体的特質、さらにこのような肉体的特質をふまえて可能となる火の発見、道具や言葉の使用といった高度な文化的能力についても言及する。そして一見非常に強く見えた動物の本能的行動は、いったん環境が変化すると役に立たなくなってしまうという欠点をもっているのに対して、人間が独自の能力によって獲得する後天的行動様式は、環境に制約されることなくみずからの意志と力で作り変えていくことのできるものであること、ここに人間のみがもちうる無限の発展可能性の原動力が存在することに気づかせようとするのである。第3時間目は、これらの人間独自の能力の獲

得は適切な社会的環境、社会的刺激の中での後天的な学習があってはじめて可能となるものであり、決して社会集団から孤立しては習得することのできないものであることをとりあつかう。それを証明するひとつの具体的な証拠は、今から50年ほど前インドのゴタムリという村で発見されたアマラとカマラという狼に育てられた少女の話である。この少女たちは捕えられた当時、地面におかれた皿に口をつけ手を使わずに物を食べ、70メートルほど離れた場所にすてられた鳥の内臓の所在を臭いでかぎつけて食べた。また夜になるとカッと目を見開き闇の中でガラガラする青い独特の光りを出した。もちろん直立歩行をすることもできなければ言葉を話すこともできなかった。この出来事は、人間は社会生活に参加することによってはじめて健全な人間として成長していくことができるという人間の社会的本性を如実に物語っているといえよう。

後半の4、5、6時間目では、これまでの人間の社会的本性についての学習をふまえることによって、家族についての生徒の意識をより新鮮なものとりかえた上で、あらためてわれわれにとって家族とは何かを問い直そうとする。ここではまず、きびしく論理的方法で子どもに自主的な独立心を要求するアメリカやヨーロッパの家庭のしつけと、親と子の情緒的な相互依存関係にもとづいてややあいまいな方法でおこなわれるわが国の家庭のしつけを比較するなかで、家族の普遍的機能としての教育作用に言及する。さらにこの教育作用をささえる愛情と信頼の関係、経済的単位としての機能や世代の再生産の機能がとりあつかわれる。最後にこれらをふまえて家族とは、もしそのまま放置されれば死ぬかもしれない非常に無力な1個の生物学的有機体として生まれてきた人間を種々の人間的能力をそなえたたくましい自立的存在につくりかえてくれるこの世に生をうけて最初にくわすばらしい仲間であることに気づかせようとするのである。

## Ⅲ 学習指導案と授業資料

## 第 1 時

① 人間はほかのどんな動物よりも成熟がおそく、環境に適応するための本能的な行動様式をもたないひ弱な存在である。					
発	問	資	料	教授・学習活動	生徒の認識
○これから人間の赤ちゃんときさるの赤ちゃんのスライドをみせますが、両者にはどのようなちがいがああるか予測してください。		スライド 「人間の赤ちゃんときさるの赤ちゃん」		○仮説の設定 ○スライドを提示しそれぞれについて教師が説明をおこなう。	○スライドでみた具体的な事実をふまえながらできるだけ多くの意見を発表させる。
○さるやかもめはどんな状態でうまれてきますか。 ○さるはうまれながらにしてどのようなすぐれた能力をもっていますか。 ○うまれてから1ヶ月までのかもめのひなはどのような順序で行動が発達していきますか。 ○これらの行動はだれから教えられるようになるのでしょうか、それとも教えられなくてもできるのでしょうか。こういう能力を何といいますか。 ○このような動物の生得的行動の例について他に知っていますか。		プリント 「さる」  「かもめのひなの行動の発達」		○資料による仮説の検証  ○かもめのひなの行動の発達についてできるだけ正確に細かく順を追ってとらえさせる。  ○さるやかもめの行動は親から教わらなくてもできるものであることに気づかせる。 ○さるやかもめ以外の例も提示する。	○さるの赤ちゃんは母親がどんな姿勢をとってもまたフルスピードで走ってもふりおとされないで自分の力でしっかりとつかまわっていることができる。 ○たまごの中から自力で殻を破って出てくる。 ○2, 3時間するとうぶ毛がフワフワになりついでに運動をはじめる。 ○5, 6時間するとまっすぐ立てるようになり2, 3歩あるく。 ○その日のうちに歩けるようになる。 ○2, 3日たつと親の警戒声によって巣から走り出し何かの下にもぐりこむ。 ○2週間たつと見知らぬものに対して鳴き声をたてて攻撃する。 ○自分でえさを食べるようになる。 ○4, 5週間で飛べるようになる。 ○動物はほとんど完全武装ともいべき精巧な本能的行動様式をもってうまれてくる。 ○例 ○幼虫から羽化したばかりのちょうが突然みごとに離陸しまいあがる。 ○くもは教わらなくてもみごとなくもの巣をはる。 ○卵から出たばかりのコウイカははじめて見た小さいエビをひじょうにうまくつかまえる。 ○草食のほ乳動物は肉食の動物から身を守るためにうまれてまもなく立って歩くことができるようになる。

<p>○人間の赤ちゃんはどんな様子をしていますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生まれたばかりの赤ちゃんにはどんな特色がありますか。</li> <li>・赤ちゃんは1ヶ月くらいでどの程度まで発達しますか。</li> <li>・さるやかもめの赤ちゃんとくらべて人間の赤ちゃんにはどのようなちがひがありますか。</li> </ul>	<p>プリント 「新生児の脳」  「知覚の発達」</p>	<p>○ヒントとしてつぎの例をだす。 1才のチンパンジーは、知的能力は同年齢のひとと同じ、運動能力はひとの4才児と同じ力に関しては8才児に相当する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大変な頭でっかちで脳が発達している。</li> <li>・大部分はねむっていて目もみえず耳も聞こえない。</li> <li>・人間は1年間早く生まれすぎたさである。</li> <li>・少しずつおきている時間がふえ目がぼやっと見えるようになり、耳も聞こえるようになる。もちろん歩くことはできない</li> <li>・人間は生得的な行動様式をもたないひ弱なすがたでうまれてきて、そういう状態がしばらくつづく。</li> </ul>
<p>○人間と動物は成育するまでにそれぞれどれくらいの期間を必要としますか。</p>	<p>プリント 「長い期間を費して成熟する」</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・さる 赤ん坊のおわり 1才 性的成熟 3才半 社会的成熟 8才</li> <li>・ひと 赤ん坊のおわり 8才 性的成熟 14才 社会的成熟 18才</li> </ul>
<p>○人間がうまれて成長するときの様子を他の動物と比べてどういふことがいえますか。</p>		<p>○動物の強さに対する人間の弱さを強調する。</p>	<p>○人間はほかのどんな動物よりも成熟がおそく、環境に適応するための本能的行動様式をもたないひ弱な存在である。</p>

第 2 時

<p>② 人間は他の動物にはみられない肉体的特質によって文化をつくりだし、自然環境の抱束をたちきって自分の意志で自由に行動することができる。人間だけが後天的な学習によって自分自身の行動を環境に適応させると同時に環境そのものをつくりかえるという大きな力をもつことができる。</p>			
発 問	資 料	教授・学習活動	生徒の認識
<p>○この前の時間に人間はひじょうに無力な姿でうまれてくるので他のどんな動物よりも長い間親の保護を必要とすることを学習しましたが、それにもかかわらず人間が「万物の霊長」といわれるのはなぜでしょうか。</p>		<p>○予測する ○霊長=不思議な力をもつすぐれたもの、万物の頭の意味</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間は学習によってすぐれた能力を獲得するための基礎となる独自の肉体的特質をそなえている。</li> <li>・人間の弱さはみせかけの弱さであり、ほんとうはそこには大きな可能性がひめられている。</li> </ul>
<p>○人間が他の動物にはないいろいろなすぐれた力をもつことができるようになった最も根本的な原因である人間独自の肉体的特質とはどのようなものなのでしょうか。</p>	<p>スライド 「ホモ・サピエンスへの長い道の</p>	<p>○仮説の設定 ○資料による検証  ○人間が直立できるようになるまでの進化の過程</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二本足で直立歩行ができる。</li> <li>・体を支えて歩くということを後足にまかせたために前足がその任務から解放され二本の手が自由につかえるようになった。</li> <li>・対向する親指—人間の手の親指は大</li> </ul>

	<p>離」 プリント 「対抗する親指」 「脳と顔面の比」</p>	<p>を簡単に説明する。  <ul style="list-style-type: none"> <li>足の指の形と比較する。</li> <li>プリントの図から人間は脳が大きくなるのに応じて顔の部分が小さくなっていること、ひたいがなめらかで広いこと、あごが退化していることにも気づかせる。</li> </ul> </p>	<p>肉体的な特質</p> <p>大きく発達しており他の指と向きあうことによってもものをつかみ細かな作業をすることを可能にしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>視点の高さ、視野の広さ一四つんばいで歩いている時よりも高い位置から見わたせしかも首の回転がしやすくなって視野が広がった。一えものや敵を早くみつけることができる</li> <li>脳が大きくて知能が発達している。</li> <li>身体にくらべて頭が大きくなりすぎ一本立ちできる前に出産しないと母体をきずつけてしまうから他の動物より1年も早産である。</li> <li>人間の男子の脳 1500cc オランウータンの脳 400cc ゴリラの脳 500cc</li> </ul>
<p>○人間はこれらの肉体的特質を基礎にしてさらにどのような新しい能力を獲得することができますか。</p> <p>プリント 「火の発見」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>人間はどのようにして火を発見しましたか。</li> <li>火の使用は人間にどんな利益をもたらしましたか。</li> <li>道具はわれわれの生活でどういう役割を果たしていますか。</li> </ul>		<p>○予測させる。 ○資料によって検証する。</p> <p>文化的特質</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>これらを原始文化の三形態ということを説明する。</li> </ul>	<p>○火の発見と使用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>落雷や火山で自然に発生した火をみつけたという説と人間が実際に火をつくりだしたという説の2つがある</li> <li>身体をあたため寒さから守る一もし火をつかえなかったらすでにほろびていた。</li> <li>夜を明るくし人間の行動範囲を広くする。</li> <li>調理にもちい食糧の保存に役立つ。</li> <li>道具の製作 <ul style="list-style-type: none"> <li>手の機能の強化、たとえば動物のするどいつめやきばにかわるものとしての石や棒</li> </ul> </li> <li>言葉の使用 経験の蓄積や意志の伝達を可能にする</li> </ul>
<p>○人間にとって文化とはどういう意義や価値をもっているということができますか。</p>	<p>プリント 「人間のもつ文化」</p>	<p>○文化の特性についていろいろな考えを述べさせ資料をふまえて一般化する。</p>	<p>○人間の生活をおどろくほど豊かならめたもの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>身体的にめぐるまれない人間をカバーするもの</li> <li>生得的なものではなく後天的に社会からひきつぎ知性と学習を通して獲得される人間としての生活様式のすべて。</li> </ul>



<p>○後天的な文化の習得によって人間は、本能的行動様式をもつ動物にはないどのような強さをもつことができますか。</p> <p>○本能的行動様式にはどのような限界がありますか。</p> <p>○後天的に習得される人間の行動にはどのような長所がありますか。</p>	<p>プリント 「飛んで火に入る夏の虫」</p>	<p>○動物の本能的行動のもつ「みせかけの強さ」に気づかせる。</p> <p>○ここに人間が万物の霊長といわれる最も大きな原因があることに気づかせる。</p>	<p>○本能は環境がいつも同じならまにあうが環境が変わると役に立たない。</p> <p>○動物の本能的行動はつねにその特殊な自然環境に制約されている。</p> <p>○人間は環境が変わってもそれに適応していくことができる—自分自身の行動を修正するだけでなく、自己の生存に都合のよいように環境そのものをつくりかえていくことができる。</p> <p>○人間は環境にしばられることから解放され自分の意志にしたがって自由に行動することが可能になる—かぎりなく発展していく力を獲得。</p>
<p>○人間の弱さは「みせかけの弱さ」にすぎないといいましたがこの弱さは何のためのものかということができますか。</p>		<p>◎検証し一般化する</p> <p>○人間のもつひ弱さを無力なものから柔軟な適応性に富んだ可能性の大きさとしてとらえなおさせる。</p>	<p>○人間の弱さそのものの中に人間のもつ大きな可能性がひそんでおり、うまれたときの人間の弱さは、成熟するにつれて他の動物とは比較にならないほど複雑な環境刺激への適応能力を身につけるための前ぶれである。</p>

第 3 時

<p>③ 人間の本性すなわち他の動物にはみられない人間独自の能力は、適切な社会環境と社会的刺激がなければ十分に発達することができない。人間は社会生活に参加することによってはじめて人間らしくなることができる。</p>				
発 問	資 料	教授・学習活動	生 徒 の 認 識	
<p>○これらの人間独自の能力はもしそのまま放置されれば健全な形で発達するでしょうか。</p> <p>○君の考えをうらづける何か具体的な事例を知っていますか。</p>		<p>○予測させる</p> <p>○そう考える理由を簡単にのべさせる。</p>		
<p>○これは今から50年ほど前インドのカルカッタの近くの村で発見された狼に育てられた2人の少女の記録ですが、彼女たちは見つかった当時どういふ点で人間よりも動物に近かったですか。</p> <p>○アマラとカマラの身体的な特徴はどのようなものでしたか。</p>	<p>スライド 「狼に育てられた少女」</p> <p>プリント 「つかまったときの様子」</p> <p>「身体的な特徴」</p>	<p>○狼に育てられた少女について概略を説明する。</p> <p>○1920年10月に発見1才半と8才くらい、アマラとカマラと名づけられる。</p> <p>○3年ほどして立</p>	<p>身体的特徴</p> <p>○あごが骨についた肉をかみちぎるためにふつうよりも発達していた。</p> <p>○犬歯がふつうよりずっと長くとがっており口の中はまるで血の色みたいたまっ赤だった。</p> <p>○目は昼間はねむくて生気がないようだったが夜12時をすぎるとカッと見開かれ闇の中で犬や猫のようにギラギラする青い独特の光りをだした。</p> <p>○耳は大きくてひらべったく興奮すると</p>	

<p>○アマラとカマラの行動の特徴はどのようなものでしたか。</p> <p>○アマラとカマラは二本足で直立することができましたか、また言葉を話すことができましたか。それはどのように変化していききましたか。</p>	<p>「行動の特徴」 「視覚と夜の行動」</p> <p>「音声とその理解」 「知性の発達」</p>	<p>てるようになり手をつかって食べるようになった。</p> <p>○4, 5年して喜びや悲しみの心を表現するようになった。</p> <p>○死ぬまでに45の簡単な言葉しか使うことができなかった。</p> <p>○知能は3才半くらいの子どもと同じだった。</p> <p>○妹のアマラは1年くらいで死んでしまうが姉のカマラは9年間孤児院で生活し17才のとき尿毒症で死んだ。</p>	<p>ゆれてふるえ色が変わった。たいへんかすかな音にも反応した。</p> <p>○地面におかれた皿に口をつけ手をつかわずに食べた。</p> <p>○70メートルほど離れた場所にすてられていた鳥の内臓の所在をにおいでかぎつけて食べた。</p> <p>○暑さと寒さを全く感じず衣服を着せてもすぐズタズタに裂いてしまった。</p> <p>○直射日光にあたると呼吸が苦しうになり暗い所へかけこもうとした。</p> <p>○人間のように2本足で歩けず4つ足で前進した。</p> <p>○4つ足で走ると非常に速くおいつくのがむずかしかった。</p> <p>○何もしゃべれず人間の音声をもっていなかった。真夜中になると独特の遠吠えをした。</p> <p>○5年くらいして色についての観念をもつことができるようになり、子どもを名前でみわけることができるようになった。</p>
<p>○なぜ彼女たちは見つけられた当時全く動物に近い状態だったのでしょうか。</p> <p>○もしカマラがもっと長く生きることができたら他の人たちと全く同じように人間の生活になじむことができたでしょうか。</p> <p>○このことは人間が人間らしく成長するためにはどのような環境が必要であることを教えてください。</p>	<p>プリント 「狼の生活から人間の生活へ」</p>	<p>○仮説の検証と一般化</p> <p>○人間が人間らしく成長していくために必要な条件について一般化する。</p> <p>○カマラがもっと長く生きていたらどうなったかについて生徒の推測を述べさせその理由を説明させる。</p>	<p>○まねをする手本が狼しかおらず、狼たちと同じ生活環境に適応していく中で人間のもつ動物的な面だけが著しく発達した。</p> <p>○一番学習の意欲と能力が豊かな2, 3才のころに習得した行動様式は「3つ児のたましい100まで」といわれるようにそんなに簡単には変わってしまわないだろう。</p> <p>○人間の本性すなわち他の動物にはみられない人間独自の能力は、適切な社会環境と社会的刺激がなければ十分に発達することができない。</p> <p>○人間的な環境はできるだけ早い時期から与えられる必要がある。</p>
<p>○これまでの3時間の学習を通して人間とはどのような特性をもつ存在であるということがわかりましたか。</p>		<p>○本時だけでなく3時間を通してわれわれは何を追求してきたのかについて考えさせる。</p>	<p>○人間は社会生活を通してのみ物質的要求を満たし人格を形成し自分の能力を発揮するという特有の社会性のゆえに集団を形成し共同生活をいとむ。</p> <p>○人間は一人だけでは生きていけない存在である。</p>

授業資料

第1時 資料1スライド11枚(省略)  
資料2

サルの子の赤ん坊の能力

サルは1日中食物の手に入る地域を、つきからつきへと移動しつづける。生まれたばかりの赤ん坊を連れた母親は、1頭しかいない子どもが胸の毛や背中毛にしっかりとつかまっているので、4本の手足を自由に使って楽々と動くことができる。サルや類人猿の子どもにとって効果的につかまるとは、呼吸するのと同じくらい基本的な機能である。母親はいつ突発的な危険におそわれ、逃げだすことになるかもしれないし、採食の途中で激しいアクロバットのような姿勢をすることもかもしれない。そんなとき、赤ん坊はたとえ生まれたばかりでも、自分の力でしっかりと母親にしがみついているなければならない。もし振り落されてもしたら、即死は免れないだろう。赤ん坊のサルがしっかりと母親にしがみつくと、いったいなんの力によるのだろうか。

ライフ編集部編 宮地伝三郎訳 『霊長類』 タイムライフブックス 1974 pp.85-86

資料3

カモメのヒナの行動の発達

ヒナが外界へ出るために行なう最初の行為は、首の力強い一連の伸張運動によって、卵の殻を破ることである。この場合に用いられる特別な筋肉は、役目を果たし終えると萎縮してしまう。ヒナは巣の中で、最初は母親に抱かれて静かに横たわっている。2、3時間すると、うぶ毛がかわいてふわふわになる。それがかわく以前に、ヒナは母親が巣の上にかがむたびに、母親のくちばしの先端に向かって、弱いついばみ運動をはじめ。これらのついばみ行為は急速に頻繁になると同時に、正確になってゆく。母親はすぐにこれにこたえて、餌を吐き返す。ヒナはこの餌をとって、飲み込む。つぎの2、3時間のあいだに、ヒナは立とうとする。はじめは心もとないが、じきにまっすぐ立てるようになる。

完全に外界に出たヒナは、羽をすきはじめる。そしてその日のうちに、2、3歩よたよたとぶざまな足取りで歩き、巣から出て歩くことができようになる。カモメの集団が敵におそわれると、親鳥は飛び立ち、警戒声を発する。するとヒナはかがみ込む。生後2、3日たっただけでも、この警戒声はかなり複雑な反応を引き起こす。ヒナはまず巣から走り出て、何かの下にもぐり込み、そこでかがむ。まもなく1羽1羽のヒナはこのようなときに、それぞれ特定の隠れ場所へと走ってゆくようになる。そして1週間とたたないうちに、飛行運動をはじめ。2週間以内には、見知らぬものを見ると鳴き声をあげ、すぐさまそれをめがけて突進し、攻撃するようになる。

やがて、ヒナは自分一人で餌を食べるようになる。はじめはいろいろなものを、みさかいなくついばむが、しばらくすると食べられないものは無視して、食べられるものだけを食べるようになる。飛行運動はだんだんしっかりしてきて、生後4、5週間で飛べるようになる。

ライフ編集部編 丘直通訳 『動物の行動』 タイムライフブックス 1974 pp.128

資料4

新生児の脳

生まれたばかりの赤ちゃんは、大変に頭でっかちです。これは胎内での栄養補給が、上半身とくに脳を中心に行っているからだといわれますが、事実新生児の脳は、かなり発達した状態で生まれてきます。たとえば新生児の脳の重量は、300~350gありますが、これは成人の脳の25%です。仮に成人の体重を50kgとすれば、出生時の体重平均3,000gはわずか6%にすぎませんから、これに比較しても脳が生まれた時点でいかに発達しているかがわかります。また脳細胞は、すでにおとなと同じ140億個がそろっています。神経も手先、足先ですっかり行き渡っています。脳細胞はこれ以上ふえることはないのので、万が一こわれてしまっても、再生することは不可能です。

しかし新生児の心の世界は、いわば白紙のようなものです。お乳を飲むときのほかに、大部分眠っていて、目も見えず耳も聞こえません。いつもうとうとと漠然とした意識の中で暮らしているのです。生後約一か月間はとりとめのない状態が続きます。心理学者が生後一か月間を新生児として扱っているのはこのような理由によるものです。

婦人伊楽部編 『初めての赤ちゃんの育て方』 講談社 昭和51年 68-69頁

資料5

知覚の発達

新生児時代は、眠る、飲む、泣くといった、いわば生存の基本的条件のくりかえしがその一日です。しかし一か月児になると、少しずつおきている時間がふえ、それにつれて心の世界がぐんぐん広がってきます。感覚器官や、手足の神経系統もかなり動くようになり、赤ちゃんの精神機能が日一日と目ざめてきます。

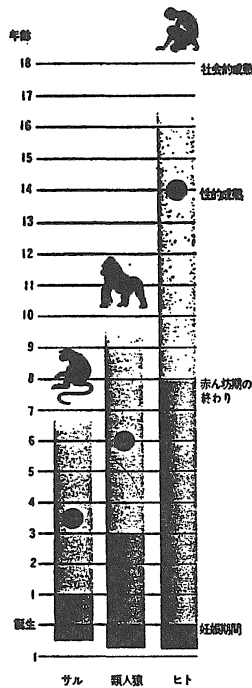
<視覚> 新生児の視力はわずかに0.01くらいで、明暗がどうにかわかる程度ですが、この月になると、少しずつ見えるようになります。最初のうちは、明るいう方向、光りに激然と目を向ける程度ですが、やがて動くもの、人の顔などが赤ちゃんの視野に入っていくようになります。赤いふさなどを赤ちゃんの目の前で動かしてみると、目で追うようになります。ただし見えるといっても、一か月ではぼやぼやと見える程度で、大変な近視で、目の動きも左右に動くぐらいしかできません。目の動きは左右にはじまって縦横、円運動と発達しますが、大方向性をもってくるのは、3、4か月のころです。

<聴覚> 聞く力は比較的早くから発達します。新生児期でも、大きな音をたてるとまばたきをしたり、全身でビクッとしたりするので、聞こえたことが推察できますが、このとき脳波をとってみると音に対して反応していることがわかります。一か月児になると、耳のそばで鈴やガラガラを鳴らしてみると、じっと聞くような様子が見られます。またひどく泣いているようなときでもお母さんが声をかけると泣きやんだりしますから、聞こえたことがわかりますし、聞きわける能力の芽生えを感じさせます。

婦人伊楽部編 『初めての赤ちゃんの育て方』 講談社 昭和51年 73頁

資料6

長い時間を費やして成熟する



霊長類は他の動物に比べると、きわめてゆっくりと成長する。それは学びとらなければならないことがたくさんあり、知識を吸収するための長い子ども時代が必要だからである。とくにヒトは、習得しなければならないことが多いので子ども時代がもっとも長い。上の図では、ゲンシとゴリラとヒトの胎内にいる期間、母親から独立し、性的成熟に達し、社会的に一人前になる時期を示した。各段階は、色分けと色合いのちがいであらわし、年齢独立の度合いが進むにつれて色が淡くなっている。

ライフ編集部編 宮地伝三郎訳 『霊長類』 タイムライフブックス 1974 p.86

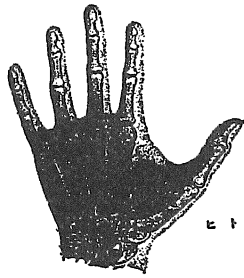
## 第2時 資料1 スライド2枚(省略)

## 資料2

## 対向する親指



リスモドキ



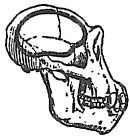
ヒト

リスモドキのような最下等の霊長類では、親指は他の指と向きあうことがない。関節の部分が回転せず先端にかぎ爪があるこの親指では、ものをつかむ能力がかぎられる。サルの親指はそれよりやや大きく手のひらに対してある角度をもつて回すことができ、他の指をいっしょに使ってものをつかむことができる。人間の親指はもっと発達しており、ずっと強大になり、手のひらとの角度も広く開いて自由に動かせる。

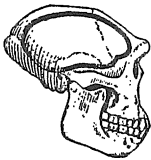
ライフ編集部編 黒田長禮訳 『哺乳類』 タイムライフブックス 1974 p.166

## 資料3

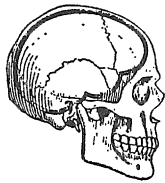
## 脳と顔面の比



チンパンジー



ホモ・エレクタス



現代人

チンパンジーからホモ・サピエンスへの頭骨の進化には2つの目立った特徴がある。1つは脳が大きくなることであり、もうひとつは顔が小さくなることである。最初の真のヒトであるホモ・エレクタスはほぼ正確に両者の中間にあり、頭蓋部の大きさが頭骨全体の約半数を占めている。しかしその構造はいぜんとして骨壁の厚い、類人猿的な特徴を示す。とくに目立つのは、まゆの部分が強く突き出ている、現代人のような大きく張り出している顔の形をまったく示していない点である。

ライフ編集部編 寺田和夫訳 『原始人』 タイムライフブックス 1974 p.85

## 資料4

## 火の発見

火がどうしてもたらされたかについては、ふたつの説がある。ひとつは落雷とか火山といった自然に発生した火によるものである。そうした火を、原始人は幾度も目撃してきていたはずだ。火は、高度に洗練されている現代人にとってもあやしい魅力をもっている。おそらく原始の人々にとってもそうであったろう。彼らはおそろおそろ、好奇心にかられて自然の火に近づいたにちがいない。燃えている枝は、手で簡単にあつかえる。その燃えさかる枝で、他の木の幹や草に火を放った人間が、火の力と不思議さにくたれたであろうことは想像にかたくない。火は暖かいことはすぐに感じとれる。いかに脳の小さい経験の乏しい人類の祖先にとっても、寒い洞穴のなかで火を使えば効果があると考え、火をもちこもうと試みるのにはさして頭をさげることなかったであろう。

はじめのうちは、稲妻によって発生した火をたまたま手に入れた場合などだけ、火を使うことができたものと考えられる。燃料を十分に手もとにたくわえ、火種を絶やさないように十分に火のあつかに到達し、1カ所から他の場所に動かせるようになるまでには、自然から手に入れた火は何度となく消えうせてしまったことであろう。そして、火が消えてしまったときの損失は鋭く感じとられ、また自然発生の火を手に入れるまでの期間が長く思われたことであろう。

火の発見に関して考えうるもうひとつの説は、人間が実際に火をつ

くりだしたことを強調して、石を削っているときに偶然に火が生まれたのだとする。このようにして生じた火花が、ベッド用の葉や動物の毛皮に引火して、くすぶりはじめたことはありうる。料理の起源は、まちがいなくこうした偶然のくりかえしの結果によるものと思われる。

ライフ編集部編 寺田和夫訳 『原始人』 タイムライフブックス 1974 p.84

## 資料5

## 道具の発明—人間を万能ならしめたもの

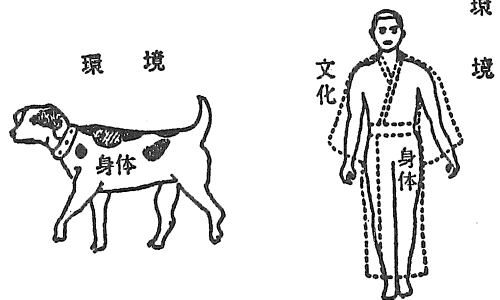


他の動物は生きるために体の構造を特殊化させているが、人間は知能を特殊化させたのでその必要がない。アルマジロは、護身のため年中骨質のよろいをつけ、イボイノシシは、餌を掘り出すため特大の牙をもつ。しかし、そんなとき人間は手先や腕で自由に着脱できるよると、用がすめばしまえるツルハシを考えだした。手先と腕は、人間の発明したどんな道具でも自由に使いこなせる。

ライフ編集部編 黒田長禮訳 『哺乳類』 タイムライフブックス 1974 p.166

## 資料6

## 人間のもつ文化



人間は他の動物と同様、環境のなかで対決しながら生きていかなければならない。この場合、人間以外の動物は持って生まれた能力=本能で環境に適応していくが人間は、文化という着物を身につけて環境に適応していく。この文化という着物は、人間の生得的なものではなく、後天的に社会から引き継ぎ、知性と学習を通してつくり上げるものであるが、この文化こそ人間の生活をおどろほど豊かならしめたのである。

大場祥義著 『文化社会学』 内田老鶴圃新社 昭和45年 17頁

## 資料7

## 飛んで火に入る夏の虫

昆虫は夜間、光の方にとんでゆく本能をもっている。それは夜間に月見草のような花にとんでいってみつをすうことができるためである。しかし人間が火をとむように進化してきた現代においても昆虫は昔と変らない同じような行動をして、火をめぐって突進し、自ら焼け死んでしまう。

またある学者がクモの観察について述べたものがある。クモは巣に綱張りの筒をつくり、そのなかにかくれて虫のくるのをまっている。昆虫が綱にかかって自由を失うと、それをおそって殺し、筒にもちかえる。ところが、筒の入口に虫がかかった場合には、クモはそれを

そおうとしなだけでなく、外敵としておそれクモは自分から退却して筒から出てしまうのである。かかったものはどんなものであっても網にかかったものだけしかおそわないというのである。

大場祥穂著 『文化社会学』 内田老鶴舎新社 昭和45年 27～28頁

第3時 資料1 スライド8枚(省略)

#### 資料2

##### つかまったときの様子

それはヤカンの底のような形をした穴で、セメントで固められたみたいに平らで、なめらかだった。まして糞や他の汚れの痕跡はまったくなかった。ほら穴には、狼に特有な独特の臭いが充満していた——ただそれだけだった。そこには、狼の家族が住んでいた。今はすみっこに、二匹の子ども狼ともう二匹の恐ろしい生き物がまるとモンキー・ボールのように、しっかりとからまりあっているだけだった。実際のところ、それらをつつ引き離すのが一仕事だった。狼の子どもよりも化け物の方が狂暴で、恐ろしい形相をしたり、歯をむきだしたり、時には私たちに向ってきたり、またかたまりあおうと走りもどったりした。私たちは遠方にくれ、お手あげとなった。しばらくして私は、あることを思いついた。まず、その地方でグリラップと呼ばれている大きな布(村人たちの冬外とう)を四枚あつめた。そのうちの一枚を彼らのかたまりの上に投げ、一匹だけ他から引き離した。こんなふうにして全部を引き離し、頭だけ自由に動けるようにしておいて、布でしばらくあげた。

J.A.L. シング著 中野善達訳 『狼に育てられた子』 福村出版 1977年 37頁

#### 資料3

##### 身体的な特徴

あごの発達 すまじい髪の毛のかたまりを切ってから、カマラとアマラの容ぼうはたいへん変わった。再び人間の子どものように見えた。だがふつうの子どもたちとは違う、いちじるしい特徴をもっていた。まずあごの形がちがっていた。あごの骨が発達し、高くなっていた。これは、今まで髪の毛で隠されて見えなかったのである。手や脚の変形と同じように、あごも骨や骨についた肉をかみつけていたため、形が変わってしまったのだ。かむときの上下のあご骨の動きも、明らかにふつうの人間とは違っていた。

歯 歯はびっしりつまって並んでいたが、とても鋭く上がった歯がありふぞろいだった。目の下の4本の犬歯は、ふつうより長く、ずっとちがっていた。口の内はまるで血の色みたいに真っ赤で、人間の生まれながらの色ではなかった。

立ったりすわったり、うずくまったり他の姿勢で地面にすわることはできたが、立ち上がることはぜんぜんできなかった。ひざや腰の関節は、開くことも閉じることもしなかった。彼女らの関節は、柔軟な動きをする能力を失ってしまっていた。こうした関節は、四つ足で歩いていたため、外部が固いまめでおおわれ、大きく、突起し、重かった。

目 目はいくぶん丸く、昼間は眠くて生気がないような顔つきをしていた。しかし、夜12時をすぎると、目はカット見ひらかれ、暗闇の中で、猫や犬みたいに青いざらざらする独特な光をおびた。夜中には、その青い二つの目の光だけで、あとは何も見えなかった。

暗闇での視覚 1921年1月3日この日、人間の視覚や活動がまったく衰えてしまう真暗な夜でも、彼女らは、凸凹のある地形を自由に動きまわることがわかった。夜中でも暗い所でも、おとなや子どもや動物や鳥やその他のものを見つることができたのだ。

興奮 興奮した時は、鼻孔から耳ざわりな音を出し息を押し出した。1922年9月18日カマラは直感でもって、孤児院の宿舎から約70メートルほど離れた構外に投げすてられた鳥の内臓の所在を知り、食べているところを現行犯としてつかまった。彼女らは何かの臭いに感づいたり、物や動物や人間を確かめようとする時は、いつも鼻を宙にあげ、空中でくくんさせ、その方向をかぎつけるのだった。また何か食べ物を与えると、必ず食べる前に臭いをかいでいた。

耳と聴覚 耳は大きくてひらべったかった。興奮すると揺れてふるえ、色が変った。彼女らの聴覚は鋭敏で、いざという時には非常に軽い足音やどんな動きもとらえることができた。

J.A.L. シング著 中野善達訳 『狼に育てられた子』 福村出版 1977 52～54頁

#### 資料4

##### 行動の特徴

食べ方 1920年11月15日カマラとアマラは、地面に置かれた皿に口をつけ、犬のように皿から飲み食いするのが常だった。飯、肉などの個形食は、このようにして手を使わずに食べた。水や牛乳のような流動物は、いつも子犬みたいにペチャペチャなめた。

寒さ暑さの感覚 寒さとか暑さの知覚は、彼女らにとって未知のものだった。冬の寒い時、衣服を着せようとしたがとてもいやがり、自分たちだけになると、それをすぐズタズタに裂いてしまうのだった。夜、毛布でくるんでやろうとするとはいでしまい、もしもまたかけてやろうとすると、はぎとってしまうのが常だった。寒さはぜんぜん感じないようだった。非常に寒い天気の時さえ、何も身につけないでいるのを好んだ。冷え冷えする季節でも、ふるえているのを見たことがないし、とても暑い日や夜でも汗をかいているのを目にしたことはない。

歩き方と走り方 カマラもアマラも、人間のようにはあるけなかった。彼女らは四つ足で前進した。またゆっくり動くときはふつう手とひざで進んだ。この姿勢だと速く走れなかった。四つ足だと非常に速く走ることができ、その時はとても追いつくのが難しかった。

眠り方 カマラとアマラは、いつも、子犬や子豚のように互いに重なり合って眠った。地面に寝る時は、すわりながらでも、よりかかりながらでも、ふつう手足を一緒にしてうずくまっていた。眠りは浅く、わずかな物音でもびっくりして目をさました。夜半すぎは決して眠らず、この年齢の子どもたちは違って、夜をこわがらず、むしろ好んでうろつくのがふつうだった。

視覚と暗闇 暗いのが好きで、宿舎でも年中いちばん暗い場所にいたがった。前に記したように、隈の方へ顔を向け、重大な問題を考へこんでいる哲学者たちみたいに、何時間も黙考しつづけ、まわりの物ごとはまるで気が直けなかった。そして薄暗くなるまでそこを離れなかった。彼女らは直射日光にほとんど耐えられなかった。短い時間でも日なたにいきせるとだんだん呼吸が苦しげになり、好きな暗い隈へと駆けこもうとするのだった。

J.A.L. シング著 中野善達訳 『狼に育てられた子』 福村出版 1977年 66～72頁

#### 資料5

##### 音声とその理解

カマラとアマラは、発見された時、人間の音声をもっていなかった。彼女らは、何もしゃべれなかった。なんの音声も口から出てこなかった。1920年12月10日私たちが耳にすることができた唯一の声は、真夜中に聞こえてくる独特の叫び声というか、ほえ声だった。これを耳にしたのは、この日の中で、ちょうど彼女らの病気がなおった時だった。この叫び声は独特なもので、しゃがれ声ではじまり、ぞっとするような鋭い悲しみにみちた声で終わったが、それは大きく絶え間なく続いた。また、非常に高い調子の骨身にしみ入るような響きをもっていた。それは、人間のものと動物のものともつかないものだった。おそらく仲間たち、すなわち狼やその子どもたちへの呼び声だったと思われる。

J.A.L. シング著 中野善達訳 『狼に育てられた子』 福村出版 1977年 89頁

#### 資料6

##### 知性の発達

1925年にみられた進歩 カマラの理解力は、救い出されてから5年後の1925年にすばらしい進歩をみせた。彼女は色についての観念をもつようになり、いつも赤い色を好んでいた。また彼女は、数人の赤ちゃんの名前がわかるようになった。名前をいうことはできなかったが、私たちがいる子の名前をたずねると、それがその子であるときはうなずき、そうでない時は首を横にふった。自分の皿がどれなのかわかるようになり、他の皿がもってこられるとそれを拒否した。今では、彼女はコップで飲むようになりたくさんのコップの中から自分のものを見分けることができた。

J.A.L. シング著 中野善達訳 『狼に育てられた子』 福村出版 1977年 148頁

#### 資料7

##### 狼の生活から人間の生活へ

カマラとアマラの年齢は、8才と1才半というように推定されたが、それぞれ1歳の子と1歳以下の子として受け入れられた。こうした年齢の幼児として扱われたのである。彼女らは言語をもたず、その

本性は、まさに動物そのものだった。彼女らは、動物の世界で、ほとんど完全なまでに動物的本性と生活条件とを身につけてしまっていた。こうした、習得されしかり身についた習慣を変えようということは、とても難しいことである。私たちは、カマラやアマラのような経験がまったくなかったのに、彼女らを実質的に理解することができなかった。だがとにかく、彼女らの身についた習慣が、新しい習慣に変えようとするに非常に多くの困難さや不自由さをもたらした、ということはたしかである。

カマラとアマラは、実際、どのようにして動物になることができたのであろうか。彼女らの身体はまぎれもなく人間のものだったが、習得した動物的な行動が自然なものになるほど変化していた。これは、彼女らがほんの赤ちゃんの時から狼の仲間の中に投げこまれたためである。この子たちには、人間の子どもたちがやるように、人間世界の中で四肢を使うという機会がなかった。まねする手本は動物しかなかったのだ。彼女らは狼を見、狼たちのまねをした。狼たちと一緒に生活や環境の条件に適応してゆく中で、彼女らの手足は変形していったのである。

J. A. L. シング著 中野善達訳 『狼に育てられた子』 福村出版  
1977年 85頁

#### IV おわりに

今回の小単元①「人間社会と家族」の授業改造は、最近のアメリカ新社会科における人間中心カリキュラムへの動きに示唆され、その内容構成の方法にかなりのヒントを得ておこなわれた。最近のアメリカでは、文化人類学や社会心理学生態学といった新しい学問領域を、これまでの古い伝統的な社会科の枠にとらわれずにもっと積極的に学習内容の中に組み入れようとする試みがさかんにおこなわれている。これらの学問領域は過去20～30年の間に著しい発展をとげ、急速に実証科学としての市民権を獲得するにいたった新分野である。しかし、これらの分野が提示する人間行動または人間社会理解のための独自の観点は、従来の社会諸科学の著しく個別化された視点からのみではとらえることのできない人間の本性 (Human Nature) についての深い洞察を可能にしている。これらの視点は、現代社会のあり方を考える上でもはや不可欠のものとなっているといってもよいであろう。アメリカでは、これにさらに国内の人種問題や国外的な世界戦略の問題という特殊な要因も加わって、社会的な動きを敏感に反映する教育界でも大きな注目をあびているわけである。わが国はもちろんアメリカと条件を異にする部分が多くその直輸入は無意味であるが、われわれはこの内容それ自体のもつ質の高さと興味深さを何とか日本の社会科の中にも自然な形で導入することができないだろうか考えた。そのためのひとつの試みとして今回の家族生活の内容構成を計画したわけである。また、教授・学習過程の原理として採用した概念探究法の理論も、1960年代以後アメリカで活発になった教育内容の現代化運動の中からでてきた考え方であり、わが国ではまだ問題解決学習の理論ほどには現場の授業実践の中で消化され定着しきってはいない。比較種族的・比較文化的内容と概念探究学習という2つの基本的視点を、わが国の社会科の風土になじんだ柔軟で深みのある教育理

論にまで高めていく中で、社会科の授業を教師にとっても生徒にとってももっと魅力のあるものにつくりかえていくことができないだろうかというのがわれわれの今回の共同研究の出発点である。本小論では紙数の関係で、具体的な授業案とその資料の前半3時間分しか掲載することができなかった。またこれらの内容が果してどの程度まで生徒の興味をひきつけ科学的な社会認識の育成に貢献しうるかということは、具体的な授業実践とその検討を待たねばならないが、これについては他の機会にゆずることにしたい。

(注)

- ① 比較種族的・比較文化的な内容構成論については、ブルーナー著 田浦武雄・水越敏行共訳 『教授理論の建設』 黎明書房 昭和41年 108—150頁、ブルーナー著 平光昭久訳 『教育の適切性』 明治図書 1972年 21—46頁 100—132頁、今谷順重 「アメリカ新社会科の人間中心カリキュラムへの動き」 朝倉隆太郎・平田嘉三・梶哲夫編 『社会科教育学研究 2—社会科カリキュラム研究の新理論』 明治図書 1976年 176—186頁に詳しい。この他大塚久雄著 『社会科学における人間』 岩波書店 1977年 208—216頁も参考にした。
- ② 最近のアメリカ新社会科の最も代表的な教授・学習理論である探究学習について紹介した書物としてつぎのようなものをあげることができる。元木健編 『探究学習のプログラミング』 明治図書 1974年 社会科教育研究センター代表大野連太郎編 『社会科探究学習の指導計画と展開 1 基礎編』 明治図書 1972年 降旗勝信著 『探究学習の理論と方法』 明治図書 1974年 今谷順重 「概念探究法にもとづく新しい単元構成のあり方——TABA社会科における Idea-Oriented Unit をてがかりとして」 『島根大学教育学部紀要第9巻教育科学編』 昭和50年
- ③ 「人間社会と家族」の6時間の授業を構成する概念的知識を注出するにあたっては、つぎのような書物をそのてがかりとした。石原静子著 『人間とは何か』 明治図書 1972年 ウィリアムJ.グード著 松原治郎・山村健訳 『家族の生物学的基礎』 『家族—現代社会学入門3』 至誠堂 昭和42年 15—35頁 大場祥護著 『文化社会学—人間と社会生活』 内田老鶴圃新社 昭和45年 青井和夫著 『家族とは何か』 講談社 昭和49年 大橋薫・増田光吉編著 『家族社会学』 川島書店 1976年 伊藤藤美 『家族学』 福村出版 1966年 詫摩武俊・依田明編著 『家族心理学』 川島書店 1972年 山室周平・姫岡勤共編 『現代家族の社会学』 培風館 昭和45年 小山隆編 『現代家族の親子関係—しつけの社会学的分析』 培風館 昭和48年